

大学生による中学校での講演

出川 英樹（大宮開成中学・高等学校）

1 はじめに

私が勤務している大宮開成中学校では、生徒指導や道徳の授業の一環として「愛知和講演」を行なっている。「愛・知・和」とは本校の校訓であり、以前は「生き方講演」とも称していた。各学年で大きなテーマがあり、中学1年では「生命」、中学2年では「伝統と文化」、中学3年では「自己理解」である。

私が以前に中学3年を担当したとき、「自己理解」をテーマにした講演の依頼先を検討した際に明治大学の大学生に依頼できないかと思い、大学の教職課程でお世話になった先生に相談した。すると、大学の授業内で紹介・募集をしてくださることになり、この企画が実現をした。

ここでは、なぜ大学生に依頼をしたのかという点と、学校内での企画・運営についての点に述べたいと思う。生徒たちにとっての「学び」を考えるとともに、現場に立つ教員として仕事の運び方について、自分なりに振り返ってみたい。

2 なぜ「大学生」の講演なのか？

本校では、「愛知和講演」をとりまとめる部署は生徒指導部であるが、具体的な中身や講演者は、学年の発想や「こうしたい」という思いを反映させることができる。私が中学3年を担当した際に、「自己理解」をテーマとした講演をどうしようかと考えた。「自己理解」という漠然としたテーマであったため、どのような講演がよいかイメージがつかみにくかったというのが正直なところである。私が思いついたのは、「自己理解」から派生する語句として「アイデンティティ」であった。中学3年といえば、「自分とは何か」を考え始める時期である。そんなときに、他者のアイデンティティに触れることによって、自己を見つめるよい機会になるのではないかと思ったのである。

さて、私が担当していた学年はよくも悪くも中だるみの時期であった。中高一貫の学校のため高校受験がなく、かといって大学受験を真剣に考えるにはまだ先のことという雰囲気はどうしても強かった。いろいろな職業や、あるいは大学の学部・学科についての「調べ学習」を実施していたが、他にも進路学習のアプローチをできないかと考えていた。

そんなときに私は、かつて自分が大学時代の授業で聞いた、「大学生と中学生を結びつけ、ナナメの関係が必要ではないか」という話を思い出した。教員・大人と生徒という関係は「評価する・される」の関係になってしまう。しかし、年代が同じ中学生や高校生では「友達とのトーク」の延長になってしまう。そこで、中学生の年代に大学生を当てるとするのは、身近な大人であり、あこがれの対象となりやすい。また、大学生であれば中学・高校時代に勉強での挫折や失敗の一つはしているだろう。もちろん、成功体験を聞かせることも有効な教育方法ではあるが、私はあえて挫折体験や失敗経験を聞かせることも有効ではないかと考えた。また、大学生が「大学はこんなに楽しい場所だ」という話をするこ

とで、中学生が大学への意識を高め、日頃の勉強への動機付けになるのではないかと考えた。

3 講演会の実施

私は、学生時代からお世話になっていた教職課程の村岡篤先生に、「明治大学の学生さんに本校で講演をしてもらえないだろうか」と相談をした。村岡先生はすぐに快諾してくださり、他の教職課程の先生にもお声をかけてくださり、授業内で学生たちに呼びかけをしていただいた。その後、数名の学生が名乗りでてくれて、実現に至ったのである。また校内では私が生徒指導部や学年団に企画書を提出し、校内の協力も得たうえで実施できる運びとなった。

本校では、この講演会を毎年6月の前後に行なっている。月曜日の6限・7限が「道德」・「学級活動(学活)」の時間のため、その時間帯に設定している。学生には5限の時間から来てもらい、簡単な打ち合わせをしている。事前に講演会の趣旨や内容を電話で話しているが、打ち合わせでは生徒集団の特徴などをより具体的に説明をした。

講演会は第1部と第2部の構成としている。第1部では、「大学生による講演」として1人10分程度の話をしてもらおう。そして第2部では、学生1人に対して本校生徒が10～15人で1つのグループとなり座談会を行なう。

第1部の「大学生による講演」では、自己紹介から始まり、自分の中学時代や高校時代のこと、現在の自分について、時系列に話してもらっている。現在の自分に至るまでの出会いや学び、成功体験や挫折体験、受験勉強・部活・アルバイトなどさまざまな話しが出てくる。

会場は、本校の合宿所の大広間で行なっている。座談会をするときに移動がしやすいこと、輪をつくりやすいこと、地べたに座ることで距離が近くなり、より活発なディスカッションができるからである。

第2部では、グループごとに自己紹介をしたり、学生への質疑応答をしたりして、よりぎっくばらんに語り合いができた。

4 実践の振り返り

まず生徒たちの反応であるが、なかなか好評であった。生徒の感想を見ると、「自分も勉強をがんばろうと思った」、「いろいろな人と関わることが重要だと思った」、「失敗することも大事だと感じた」、「大学生がうらやましい」など、前向きな内容のものがほとんどであった。やはり年齢が近いということから身近さを覚え、講演会そのものを「楽しかった」ととらえている。

一方、学生にとっては、中学生の前で実際に話しをするいい機会になっているようである。大学1～3年生にとっては、教育実習の前にこのような体験ができるのは大きいのではないだろうか。たとえ10分であっても、生徒たちの前で話すことや、興味を持たせ続けることの難しさを実感してくれたようである。

5 終わりに

この「大学生による講演」は5年近い取り組みになっている。この企画は、明治大学の学生や資格課程事務室、教職課程の先生方の協力があって実現しているものであり、この場を借りて深く感謝を申し上げたい。

私が大学を卒業してから10年以上経つのに関わらず、学校現場と大学を結ぶことができたのは大変うれしく思った。今後も、明治大学OBとして、また教育会の一員として、学校現場ならではの視点や取り組み、悩みや課題を提示し、次世代の教育を担う学生たちと交流を広げていければと願っている。